

逆境は神仏様の

おんちようてきしれん
恩寵的試練

奇しくも私達は『日本人は世界に

誇る素晴らしい民族』という事を、

先の震災で、改めて思い知る事になりました。そして、その素晴らしい日本の民族精神が、世界の人々の心を震わせ『日本人の精神文化は素晴らしい』という賞賛の声として私達に届けられています。

『ニューヨーク・タイムズ』が「アメリカ人は日本人の精神に学ぶべきだ」と記しました。それは平成十七(二〇〇五年)、アメリカで起きたハリケーン・カトリーナの時に、住民が暴徒化してショッピングセンターから好きな物を盗り放題、どんどん盗っていったってしまった。そんな映像が日本でも流されましたが、それに比べ日本人は、配給にキチンと並んで、暴徒化する気配もありませんでした。各国がそんな日本人のマナーに賞賛を送り、支援を申し出た国も百三十ヶ国以上だといえます。「義に生きる」古き良き日本人の精神が東北の地にはシツカリ残っていたと

いう事だと思えます。そんな一番日本人らしく真面目に生きて来た東北の人達が大きな被害を受けた事に、私自身疑問でした。なぜ東北だったのか？と。しかし、その疑問が氷解する瞬間がありました。

慶應義塾大学講師の竹田恒泰氏の記す逸話に、私は涙を抑える事が出来ませんでした。『懇意にしている友人が震災直後に四ノトラックに沢山食糧を積んで被災地に向かった。どこの避難所が困っているか情報を得て届けに行ったのですが、到着すると被災者の方が「うちよりもこの先の避難所の方が困っているから、そっちに行ってほしい」と。「少し物資を置いていきましようか？」と聞くと、「いや、全部持つていってくれ」と。指定された避難所に行くと、やはり「更に奥の方が困っているから」と言われ、結局、計十一ヶ所と同じ事を言われたそうです。十二ヶ所目の避難所は本当に困っていて、涙、涙で感謝されて炊き出しをして帰ってきました。ところが彼が帰京してテレビをつけて驚いたことには、断られた避難所のいくつかが、「この避難所は非常に物資が欠乏していて、一日一個のおむすびしか食べていない」と紹介されていたそうです。その一個すら無い所があるから、そっち

へ行ってほしいと…。』そんな悲惨な状況で、もし私とその立場だったら、おそらく「物資を置いていってくれ」と懇願すると思います。これは、夢であってほしいと思いたくなる程の悲惨な状況で、世界に冠たる美しい日本人の精神性を発揮する事が出来る土地柄…：だから東北だったんだなあと思えました。古き良き日本の風土が一番残っていて、その姿を見て日本国民全体が日本人であることの誇りに、いま目覚め始めているのではないのでしょうか？現代に生きる私達が、二千年以上も紡いできた日本民族としてのDNAに気付き出している様に思います。一見、個人主義、拝金主義に覆われ、古き良き日本の精神は失われてしまったように見えていたけれど、現在全国から十万人以上の日本人ボランティアの登録がある現状を知れば、まだまだ捨てたもんじやないという勇氣と元気が湧いてきます。

また今回、被害に遭われた方々のインタビューを受けている姿を見ていると、恨んでいる様子の人はほとんどおられません。家を流され、肉親が行方不明になっても、天を恨まず、それを試練として受け止めている様です。その姿を外国人も高く評価しています。が、同じ日本人から見ても立派ですよ

ね。日本は長い二千年もの歴史の中で地震に限らず、戦争もあったし、飢饉もあったし、元寇(蒙古襲来・文永弘安の役です。鎌倉時代、元の軍隊が日本に來襲した事件。元のフビライは日本の入貢を求めたが鎌倉幕府に拒否され、日本に二度までも攻めてきたが、その二度とも大風が起って元艦の沈没するものが多かった)もありました。しかしそういう国難を乗り越えてきた民族である事を、私達は思い出しつつあるのではないかと思います。

「災い転じて福となす」と言うように、大きな視野で見つめると、この大災害を悲惨な結果で終わらせるのではなく、私達の生き方を見直すきっかけ、チャンスにしなれば、尊い命を亡くされた方や、被災された方々が報われないものと思えます。この度は多くの方々尊い命が失われましたが、物質至上主義的文化が蔓延してしまった現代では、そうした特別な出来事でもなければ、もはや自分が生かされている事がいかにかに希有なことか、実感を持ってなかったのではないかとも思います。哲学者であり、『修身教授録』で有名な故・森信三先生は「逆境は神仏の恩寵的試練」と仰っております。

これまでの、自分さえ良ければ精神が蔓延していた日本人。我が国の歴史を忘れて生きてきた日本人が、神仏様から、『これをきっかけに生まれ変わるタイミングを用意したぞ』というメッセージが送られている様に思います。大震災のつい数ヶ月前には、宮崎県は高千穂連山の**新燃岳**（しんもえだけ）が噴火しました。天孫降臨（てんそんこうりん）の地である高千穂の峰がすぐ傍ですから、その山が噴火したという事は、日本の神仏様が怒っていらつしやる証拠だったのかもしれない。しかし新燃岳が噴火しても、地元の人以外には、別段生活に支障もなく、神仏様の怒りなんて事にも全然気付きませんでした。気付かないのなら…という事で、天災という形で私達に気付かせようとされたのではないかと勝手に思案しています。石原慎太郎都知事ではないですが、私も「天罰が下った」と思った一人ですが、それは東北の人が罪を犯したのではなく、日本人全体への罰、あるいは世界人類に対する精神的警告と言えるような気が致します。つまり、世界であれば日本国。日本であれば東北の地を選ばれた。そしてこの耐えがたい試練をシツカリと受け止め、克服し、更に

生かしてくれるはずだ、という期待を込めて選ばれたのではないかと思う。ちなみに日本の地震事情というのは、年に一度はマグニチュード七級の地震が起きており、十年に一度は八級、百年に一度は八・五級が起きるという周期なのだそうです。これはもちろん確定ではありませんが、今回のような九以上のものは千年に一度という事になるそうですね。であるならば、いま日本が千年に一度と言われる大災害に遭ったことに意味があるとすれば、「日本人よ、自分達の国の素晴らしさに目覚めよ。そして諸外国の人類を含め、未来を明るく照らす燈明になりなさい」という啓示だったのではないかと、宗教的な立場から感じます。

哲学者の和辻哲郎さんは『強固な石の城を築いて自然と闘い、克服しようとする西洋文化とは対照的に、木で建物を造る日本人は自然と共生し、自然の猛威に倒されても、その都度見事に立ち直ってきました』と指摘しています。繰り返しますが、震災前の私達は、自分さえ良ければ他は関係ないといつて、所得を上げることに躍起になっていたところがあるように思います。しかし所得を上げることが必ずしも幸福には繋がらない事を私達は既に知っています。事実世界の先進諸国では、豊

かさの極みの中で多くの人が苦悩を抱えています。ではどうするか？そこに信仰心の必要性があるのではないのでしょうか？そこで『信仰』とは…先人達が培ってきた伝統的な習俗をまとめ上げた感性と言えます。そして伝統的な習俗は、その根幹が全て命の尊厳に繋がっています。例えば「頂きます」「ごちそうさま」といった当たり前の感謝する気持ち。お正月、節分、お盆などの生死に関する行事等々、全てが命のルーツ、命の存在意義を伝えていきます。そしてそれらを具現化したものが伝統的な習俗と言えます。古来日本人は、先人達から継承してきた習俗を通じて、与えられた命の尊さを実感し、感謝の念を育んできました。春夏秋冬、移りゆく季節の中で…また、花鳥風月の中で調和して生きる事の中に一番の喜びを見出し、たとえ物質的には恵まれていなくても、そこに精神的な豊かさを見出していました。ところが戦後、欧米から物質至上主義的文化が大挙して流入してきたことから、物やお金ばかり追求する風潮が蔓延し、日本人の精神構造は変質した歴史があります。物質への欲求には際限が無く、その結果、現代に生きる私達の多くが、生きる目的を見失い、心は虚ろになっています。更に**生活が便利で豊か**

になったことで、現代人は普段から生と死を意識することが殆ど無くなりました。かつては食べ物を獲得するのも命懸けで、人は日々死を覚悟して生きてきました。それだけに、生かされている事への歓喜や感謝の念が深く、命は生き生きと躍動し、生のダイナミズムに溢れていた事を感じます。

【勤勉・正直・親切・誠実・忍耐・克己・感謝・報恩】…これらは私達の祖先が大事にしてきた伝統的精神文化です。この精神文化を呼び覚ます事が、私達日本人全員の課題であり、真の復興を成し遂げることになるものと思います。復興は決して被災地の皆さんだけの問題ではなく、**日本人全員の問題だ**と思います。今こそ、神仏様からのメッセージを読み取り、他を益する【自分】という、各自が分相応の力を出し合い、結集していくところに、真の復興、精神文化の復興と共に、**日本国の復興**が成るものと信じます。 合掌 谷川寛敬

